（岩倉紙芝居館古典館<http://hjueda.on.coocan.jp/koten/koten.htm>　　　宰主　上田啓之）

　　凡て十四章。第二章より以下、孟子の出處行實を記すこと詳らか爲り。

　孟子の曰く、天の時は地の利に如かず、地の利は人の和に如かず。天の時は、時日･支干･孤虛･王相の屬を謂ふ。地の利は、險阻、城池の固にして、人の和は、民心の和を得るなり。
■時は四時（四季）、日は月日。支は十二支、干は十干。孤虛は布陣の法、王相は盛衰の循環。諸葛孔明が赤壁の戦で、季節風が何時どの方向から吹き始め、どの方向へと変わるかを知り布陣をし、その風の盛衰に合わせて攻撃をするが如きもの。日本人は、天時、地利、人和この三つを得て盤石とするが、孟子は、天時、地利、人和の関係を天時＜地利＜人和と定めた。天地人と時利和を組み合わせた。孔子が、兵＜食＜信としたがごとき。

　三里の城、七里の郭（くるわ）、環（めぐ）りて之を攻めて勝たず。夫れ環りて之を攻む、必ず天の時を得る者有らん。然れども勝たざるは、是れ天の時は地の利に如かざるなり。夫fúは音扶。○三里･七里は、城郭の小なるもの。郭は外城、環は圍なり。言ふは、四面攻め圍む、日を曠（むな）しくして持つこと久し、必ず天の時の善きに値（あ）ふ者有らん。
■一里は約四百メートル。三里の城、七里の郭（外城）を四方から囲んで攻めても勝てない。天の時を得る者が必ず有るはずであるが、勝てない。天時＜地利であるからと云ふ。これだけではピンとこない。

　城高からざるに非ず、池深からざるに非ず、兵革堅利（けんり）ならざるに非ず、米粟多からざるに非ず。委（す）てて之を去る、是れ地の利は人の和に如かざるなり。革は甲なり。粟は穀なり。委は棄なり。言ふは、民心を得ざれば、民爲に守らざるなり。
■非不、否定の否定。高くない訳でない、高い。城は峻険、武器、兵糧は十分あっても捨てて之から逃げ去ることがある。地利＜人和が成り立つと云ふ。朱熹は民心を得ねば、民が守らずその地を去るとみた。之は、城を含むその地域となる。次の条との関連から、治める者と治められる民との和と解釈した。これは深読みである。之は城、武器、兵糧とすべきで、孟子は、人の和の人は城内の人、治める側、王族、家臣を想定していよう。王族の不和、家臣との不和、家臣の不和で地利が活かせない。

　故に曰く、民を域（かぎ）るに封疆（ほうきょう）の界を以てせず、國を固むるに山谿の險を以てせず、天下を威（をど）すに兵革の利を以てせず。道を得る者は助け多く、道を失ふ者は助け寡なし。助け寡なきの至りは、親戚之に畔（そむ）く。助け多きの至りは、天下之に順（したが）ふ。域は界限なり。
■封疆は国境の土手、土を盛り上げて築くこと。民を域内にとどむるは封疆ではない。国境を固めるものは、山や谷の峻険さではない。天下に威を示すものは、兵革（武器甲冑）の利（いきおい、ちから）ではない。道を得ることとする。得道→多助→天下順之。失道→寡助→親戚畔之。

　天下の順ふ所を以て、親戚の畔く所を攻む。故に君子は戰はざること有り。戰へば必ず勝つ。言ふは、戰はざれば則ち已み、戰はば則ち必ず勝つ。尹氏が曰く、言ふは、天下を得るは、凡そ民心を得るを以てするのみ。
■これは微妙な問題を含む。親戚が畔くは一般論ではすまない。周初において武王が亡くなり、その子、幼い成王の摂政として周公と召公が後見をした。これに反して、親戚の管叔鮮、蔡叔度は殷の武庚を担ぎ上げて乱を起こし、武力で平定した。周公とは云へ、天下順はざれば、如何ともし難し。ほう、孟子先生、高飛車にお出になりましたな、お手並み拝見と、なりましょう。
読書会:[2011年9月10日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai8.html#2011年9月10日)

。○孟子將に王に朝せんとす。王人をして來らしめて曰く、寡人就いて見るが如き者なり。寒疾有り、以て風（かぜ）す可からず。朝（あした）に將に朝を視んとす。識らず寡人をして見ることを得せしむ可けんや。對へて曰く、不幸にして疾有り。朝に造（いた）ること能はず。章内の朝は並音潮cháo。唯朝將の朝zhāoは字の如し。造zàoは七qī到dàoの反(音が合はない)。下も同じ。王は齊王なり。孟子本より將に王に朝せんとす。王知らずして疾に託して以て孟子を召す。故に孟子も亦疾を以て辭せり。
■孟子が朝廷に王を訪問せんとしていた。そこへ、王からの使者がやってきた。■寡人は王が自らを謙遜して云ふ。如就見、如は赴く、就は近づく、自ら赴き近く会見しようとする。寒疾は風邪をひくこと、外出して風にあたることができない。明日の朝に、朝廷に来てはくれまいか。自分をして訪問せしむることができるか分からない、つまり、出来ない。■孟子は、自分も病で行けないと返事をした。王が病と称して孟子を召そうとしたが、孟子は同じ手を使って行こうとしなかった。

　明日出でて東郭氏を弔す。公孫丑が曰く、昔（きのふ）は辭するに病を以てす、今日（けふ）弔す。或（もし）くは不可か。曰く、昔（きのふ）は疾めり、今日は愈えぬ。之を如何ぞ弔せざらん。東郭氏は齊の大夫の家なり。昔者は昨日なり。或者は疑ふ辭。疾を辭して出でて弔すは、孔子の孺悲を見ずして、瑟を取りて歌ふと同じ意。
■孟子は翌日、齊の大夫の東郭氏の弔いに出かけた。公孫丑は前日病として朝廷を訪問せず、今日弔いに出るのはよろしくないのではと懸念を述べた。前日は病気だったが今日は癒えたのだから弔いに出てどうしておかしいことがあろうかとする。

　王人をして疾を問はせ、醫をして來さしむ。孟仲子對へて曰く、昔（きのふ）は王命有り、采薪の憂ひ有りて、朝に造（いた）ること能はず。今（けふ）病小しく愈へぬ。趨りて朝に造る。我識らず、能く至るや否や。數人をして路に要（また）せしめて曰く、請う、必ず歸ること無くして、朝に造れ。要yāoは平聲（待ち伏せる）。○孟仲子は、趙氏以為（おもへら）く孟子の從昆弟、孟子に學ぶ者とするなり。采薪の憂ひは、言ふは、病みて薪を采ること能はず。謙辭なり。仲子權辭して以て對へ、又人をして孟子を要せしめ、歸ること勿くして朝に造らしめ、以て己が言を實にす。
■齊王は気遣って医師を派遣して孟子の病状を問はした。留守を守っていた孟仲子は慌てた。昆弟は兄の意兄弟で、従昆弟ならば従兄同士。■采薪憂は礼記曲礼に、「君、士をして射せしめ、能はず。則ち、疾を以て辞し、言ひて曰く、某（それがし）負薪の憂有り。」とある。薪（たきぎ）を背負って疲れのあること、気分が優れず薪も採りにゆけない、断りの常套句。孟仲子は本日は病が癒えており、朝廷に出たものと思うが、でているかどうかは分からないと茶を濁した。数人を孟子が帰って来そうな路に待たせて、家に帰らず朝廷に直行するように伝へせしめた。

　已むことを得ずして景丑氏に之きて宿す。景子が曰く、内には則ち父子、外には則ち君臣、人の大倫なり。父子は恩を主とし、君臣は敬を主とす。丑、王の子を敬するを見る。未だ王を敬する所以を見ず。曰く、惡（ああ）、是れ何と言ふことぞ。齊人（せいひと）仁義を以て王と言ふ者無し。豈仁義を以て美ならずとせん。其の心に曰く、是れ何ぞ與に仁義を言ふに足らん、と。爾（しか）云はば、則ち不敬是より大いなるは莫し。我堯舜の道に非ざれば、敢へて以て王の前に陳せず。故に齊人我が王を敬するに如くは莫し。惡wūは平聲。下も同じ。○景丑氏は、齊の大夫の家なり。景子は景丑なり。惡は歎の辭なり。景丑が言ふ所は、敬の小なる者なり。孟子言ふ所は、敬の大なる者なり。
■孟子はやむを得ず斉の大夫の景丑氏の所に泊めてもらった。景丑は事情を聞き、儒家は内には父子の恩、外には君臣の敬を云う。しかるに王は子（先生）を敬するも、先生は王を敬さない。■孟子は、なんと言ふことを、と反論する。齊人は王と仁義について語らない。（あなた方は）仁義を美、よきものとしない。仁義など共に語るに足らずと思っておられる。■云爾は前に述べたことをまとめて、このとおりと云ふ語。■といふことは、その方がはるかに不敬となりますな。私は、堯舜の道でなくば、王に申し上げることはない。齊の人は私が王を敬するほど敬してはいないようですな。

　景子が曰く、否、此を謂ふに非ず。禮に曰く、父召せば諾（だく）すること無し、君命じて召せば駕を俟たずと。固より將に朝せんとす。王命を聞いて遂に果たさず。宜しく夫（か）の禮と相似ざるが若く然り。夫fúは音扶。下も同じ。○禮に曰く、父命じて呼ぶは、唯wéiして諾nuòせず。又曰く、君命じて召すは、官に在りては屨（くつ）を俟たず、外に在りては車を俟たず。言ふは、孟子本より王に朝せんと欲して、命を聞いて中に止む。此れ禮の意と同じからざるに似れり。
■景子はそういうことではないと否定する。■唯諾は應辭。唯は諾より恭（うやうや）し。諾と応へるとゆったりとして生意気な印象を与へる。唯は「はい」諾は「わかりました、承知」。君命で召されれば、何を差し置いても、朝廷に駆けつけるのが禮である。先生は王命を聞いて結局果たしておられない。禮に合わないのじゃないですか、と景子が突いた。
読書会：[2011年10月15日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai8.html#2011年10月15日)

　曰く、豈に是を謂はんや。曾子の曰く、晉楚の富は、及ぶ可からず。彼は其の富を以てし、我は吾が仁を以てす。彼は其の爵を以てし、我は吾が義を以てす。吾何ぞ慊（うら）みんや。夫れ豈に不義にして曾子之を言はんや。是れ或は一道なり。天下達尊三つ有り。爵（しゃく）一つ、齒（よはひ）一つ、德一つ。朝廷は爵に如くは莫し。郷黨は齒に如くは莫し。世を輔け民に長たるは德に如くは莫し。惡んぞ其の一を有して、以て其の二を慢（あなど）ることを得ん。與yúは平聲。慊qiǎnは口kǒu簟diànの反。長zhǎngは上聲。○慊は恨なり、少なり。或は嗛に作る。字書に以為（おもへら）く口物を銜（ふく）むなり。然るは則ち慊も亦（また）但（ただ）心に銜む所有るの義とす。其の快とし、足とし、恨とし、少とするは、則ち其の事に因りて銜む所同じからざること有るのみ。孟子言ふは、我が意、景子の言ふ所の如きは、曾子の言を因りて引くに非ずして云ふ。夫れ此れ豈に是れ不義にして而して曾子肯（あへ）て以て言を爲す。是れ或は別に一種の道理有り。達は通なり。蓋し天下の尊ぶ所に通じて、此の三つの者有り。曾子の說は、蓋し德を以て之を言ふ。今齊王は但爵有るのみ。安んぞ此を以て齒德を慢（あなど）ることを得んか。
■孟子は更に反論する。曾子の言葉を持ち出した。弟子に、強大な晉や楚に弱小の魯がどう対抗するかを聞かれてこたえたものかもしれない。晉や楚は魯に比べればはるかに富んでいる。晉や楚が、その富によるなら、私は吾が仁によろう、晉や楚がその爵(地位)によるなら、私は吾が義によろう。富や爵に劣るからとてそれをどうして恨もうか。曾子は孔子の王道を説き、仁義有りてこそ、富や爵が正しく行はれるとしたのであろう。■孟子は、この曾子の言葉を、諸侯に面と向かって言ふならば、それは不義であろうか、不遜といふか、諸侯をないがしろにするものであろうか？と孟子流に練り直した。一つの道のあり方である。天下で通用する尊とは、爵（地位）、齒（年齢）、徳の三つ。朝廷では爵、郷党では齒、世を補佐し民の長たるには徳が一番である、と孟子流の簡潔な喩えとした。■そして、一つを持って、他の二つを侮るとすればいかがなものか。若い齊王は国王といふ一等の爵をお持ちであるがそれは朝廷では通っても、齒と徳を侮るとするなら郷党や天下では通用しませんぞ。孟子はそう弁じることで状況をひっくりかえした。

　故に將（まさ）に大いにすること有らんとする君は、必ず召さざる所の臣有り。謀ること有らんと欲すは、則ち之に就く。其の德を尊び道を樂しむこと、是の如くならずば、與にすること有るに足らず。樂lèは音洛。○大いにすること有る君は、大いに非常を作爲すること有る君なり。程子の曰く、古の人必ず人君の敬を致し禮を盡くすを待ちて、而して後に往く所以は、自ら尊大を爲すを欲すに非ず。是が爲の故のみ。
■大有為之君とは湯王や文王や武王を想定する。不召之臣とは召し出すのではなく、こちらから出向いてゆく、いわゆる三顧の礼をもって迎へる、徳を尊び、道を楽しむことさような人物でなくば、共にするに足らず。齊王をそういう王とするのが齊の臣下の役割であると逆ネジを食らはした。

　故に湯の伊尹に於る、學んで後に之を臣とす。故に勞せずして王たり。桓公の管仲に於る、學んで後に之を臣とす。故に勞せずして霸たり。先ず從いて學を受く、之を師とす。後に以て臣として、之に任ずる。
■學焉而後臣之、焉は語気を強める。まず学ぶんだ、それから臣にする。湯はまず伊尹に学び、そのうえで臣とする。桓公もまず管仲に学び、そのうえで臣とする。だから、王たり得、覇たり得た。まずは、私、孟子に学びなさい、であるが、自分からそれを押し付けねばならないのが孟子のつらいところであった。

　今天下地醜（たぐひ）し德齊（ひとし）ふして、能く相尙（しょう）すること莫し。他無し。其の敎うる所を臣とすることを好みて、其の敎を受くる所を臣とすることを好まずんばなり。好は去聲。○醜は類なり。尙は過なり。敎うる所は、己に聽き從い、役使す可き者を謂ふ。敎を受くる所は、己の從ひて學ぶ所の者を謂ふ。
■醜は東斉の方言、同類、ひとしい。齊は、つらなる、ひとしい、おしなべて。尙は過ぎるとしている。つかさどる、支配する。たっとぶ。地の美しさにおいても、徳もおいても抜きんでたものがない、互いにこれぞといふものがない。王の言ふことを聴き従ふ臣を好み、王が教えを請うような臣を好まないことによる。

湯の伊尹に於る、桓公の管仲に於るは、則ち敢へて召さず。管仲且つ猶召す可からず。而るを況や管仲をせざる者をや。管仲をせざるは、孟子自ら謂ふなり。范氏が曰く、孟子の齊に於る、賓師（ひんし）の位に處る。仕ふに當り官職有る者に非ず。故に其の言此の如し。○此の章、賓師は趨走承順（すうそうしょうじゅん）することを以て恭とせずして、難（かたき）を責めて善を陳ぶることを以て敬とし、人君は崇高富貴を以て重しとせず、而して、德を貴び士を尊ぶを以て賢とすれば、則ち上下交はりて德業成るを見（あらは）す。
■賓師　客分として遇すべき師。趨走承順　素早く走るようにすすみ、命に従うこと。■責難　することのむつかしいことを責め望む。■湯は自ら出向いて伊尹を求め、桓公もそうして管仲を求めた。桓公を覇者とした管仲ですら召すことをしていないといふに、管仲と異なり齊王を王者とせむとする私（孟子）を召すとは嘆かはしい。王の方からお出まし頂くべきものである、とぬけぬけと言ってのけた。たいへんな戦略家である。
読書会：[2011年11月12日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai8.html#2011年11月12日)

陳臻（ちんしん）問ひて曰く、前日齊に於て、王兼金（けんきん）一百を餽（おく）る。而して受けず。宋に於て七十鎰（いつ）を餽る。而して受く。薛（せつ）に於て五十鎰を餽る。而して受く。前日の受けざるが是ならば、則ち今日の受けたるは非ならん。今日の受けたるが是ならば、則ち前日の受けざるは非ならん。夫子必ず一つに此に居る。陳臻は孟子の弟子。兼金は、好金なり。其の價常に兼ね倍する者。一百は百鎰なり。
■兼金　値段が普通の金に倍する良い黄金。■餽　食物、また、物品を贈る。鎰　金貨の目方。二十両。二千両、千四百両、千両という大金。■夫子必居一於此　此は前日不受が是か非か、必ずどちらか一つをとる。
　孟子曰く、皆是なり。皆義に適ふなり。
■孟子は、どちらも是（ぜ）とした。
　宋に在るに當りて、予（わ）れ將に遠く行くこと有らんとす。行く者は必ず贐（じん、はなむけ）を以てす。辭して曰く、贐に餽（おく）ると。予れ何爲（なんす）れぞ受けざらん。贐jìnは徐xú刃rènの反(音が合はない)。○贐は、行く者を送るの禮なり。
■贐、旅に出る人に贈る品物。餞別として頂いたものをお断りすることはできない。千四百両の餞別とは餞別と言ふべきか。■辭　(宋君が)いとまを告げる。
　薛に在るに當りては、予れ戒めの心有り。辭（ことば）して曰く、戒めを聞く。故に兵の爲に之を餽る。予れ何爲れぞ受けざらん。爲wèi兵の爲は去聲。○時の人孟子を害せんと欲する者有り、孟子兵を設けて以て之を戒め備ふ。薛の君金を以て孟子に餽りて兵の備を為（せ）む。辭して曰く、子の戒心有るを聞く。
■當　～の時にであるが、薛君の面前で戒心をみせたのであろう。　■戒心　警戒心。孟子一行は「後車数十乗、従者数百人」といふことがあり、治安が悪ければ遊説には危険が伴った。薛君が警備の費用を餞別とされた、それをお断りすることはない。
　齊に於るが若きは、則ち未だ處（す）ること有らず。處ること無して、之を餽るは、是れ之を貨（たから）にする。焉んぞ君子にして貨を以て取る可きこと有らんや。焉は於yú虔qiánの反（声が合はない）。○遠く行き戒める心の事無し。是れ未だ處る所有らざる。取は猶致のごとし。○尹氏が曰く、言ふは、君子の辭受取予は、唯理に當たるのみ。
■貨は、まいない、賄賂の事でもある。理由なくもらう金品は賄賂であり、君子は受け取るべきではない。
　孟子平陸に之（ゆ）き、其の大夫に謂ひて曰く、子が持戟（じげき）の士、一日にして三たび伍を失はば、則ち之を去（す）てんや否や。曰く、三たびを待たず。去qǔは上聲（取りさる、のける）。○平陸は齊の下邑なり。大夫は邑宰なり。戟は枝有る兵、士は戰士、伍は行列、之を去つは之を殺すなり。
■孟子が平陸の大夫、距心を訪れた時のこと、他にも4名知っているとあるので、地方の実情を把握する旅に出たことが伺へる。■戟は矛で先が枝分かれしている兵器。伍は戟の兵士の単位、五人の兵士を最小単位とした。■失伍はの失は誤る、乱すこと、五人の持戟の士の矛先が揃はない。■朱熹は去之を殺すとした。三度乱すを待たずとあり、二度乱せば殺すとなろう。
亦　然らば則ち子が伍を失ふこと亦多し。凶年饑歳には、子が民老羸（ろうるい）は溝壑（こうがく）に轉じ、壯者は散じて四方に之く者幾千人。曰く、此れ距心が為ることを得る所に非ず。幾jǐは上聲（いくばく）。○子が伍を失ふは、言ふは、其の職を失ふこと、猶士の伍を失ふがごとし。距心は大夫の名。對へて言ふ、此れ乃ち王の失政、然らしむは、我が得て專らにする所に非ず。
■老羸は老いて身体の弱った者。壑は谷、溝や谷に転がる（野たれ死んでいる）。
　曰く、今人の牛羊を受けて之が爲に之を牧（か）ふ者有らん。則ち必ず之が爲に牧と芻（くさ）とを求めん。牧と芻とを求めて得ず、則ち諸を其の人に反さんか。抑々亦立ちて其の死を視んか。曰く、此は則ち距心が罪なり。爲wèiは去聲（～の為に）。死與の與yúは平聲（～か）。○之を牧ふは、之を養ふなり。牧は牧地なり。芻は草なり。孟子言く、若し自ら專らにすることを得ずんば、何ぞ其の事を致して去らざる。
■孟子は、人の牛羊を預かり、牧場と牧草が得られないとすれば、その人に返すか、放置して牛羊が死ぬのを座視するか、と問ふ。大夫は王から人民を預かり、凶年饑歳にあって人民が死ぬのを座視した、と暗示した。■大夫の距心はそれを自分の罪とした。
　他日王に見（まみ）へて曰く、王の都を爲（おさ）むる者、臣五人を知る。其の罪を知る者は、惟孔距心のみ。王の爲に之を誦す。王の曰はく、此は則ち寡人が罪なり。見xiànは音現（まみゆ）。爲王の爲wèiは去聲。○都を爲むは、邑を治むなり。邑に先君の廟有りて都と曰ふ。孔は大夫の姓なり。王の爲に其の語を誦すは、王を風曉する所以なり。○陳氏が曰く、孟子一言にして齊の君臣舉（みな）其の罪を知る。固より以て邦を興すに足れり。然れども齊卒（つひ）に善國に爲るを得ざるは、豈說んで繹（たず）ねず、從ひて改めざる故に非ずや。
■誦は説く、話すことであるが、そしる、訴える意味もある。孟子は、孔距心の人柄を知って、その言質をとり、斉王に伝えた。斉王に自分に罪が有ると言はしめた。これは一つの成果であったが、それ以上には進展しなかった。陳氏は他の臣はこれに従はなかったとみた。
読書会：[2011年11月26日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai8.html#2011年11月26日)
　孟子蚔鼃（ちあ）に謂ひて曰く、子が靈丘を辭して士師を請ふは似たり。其の以て言ふ可きが爲（ため）なり。今旣に數月。未だ以て言ふ可からざるか。蚔chíは音遲。鼃wāは烏wū花huāの反。爲wèiは去聲。與yúは平聲。○蚔鼃は齊の大夫なり。靈丘は齊の下邑。似は、言ふは、する所近く理有るに似たり（わけがあってそうするようなこと）。以て言ふ可きは、士師は王に近く、以て刑罰の中らざる者を諫めて得るを謂ふ。
■士師は裁判、刑を掌る長官。刑罰が適正でなくば王を諌めることができた。■孟子は、臣五人の中で、大夫としてその罪を知る者は孔距心のみとした。大夫蚔鼃に対しては厳しい対応をした。孟子は、蚔鼃にこう言った。貴方が靈丘の邑を辞めて、士師を請ふはそのためでしょう。言ひたいことあってそうされたといふに、数か月たって、どうして、まだ何も言はれない。
　蚔鼃王を諫めて用ゐられず、臣爲ることを致して去る。致は猶還のごとし。
■大夫蚔鼃は、何か分からないが、斉王を諌めた。臣としてすべきことをしたが諫言は用ゐられず、朝廷を去った。孟子はけしかけた、そして、予想通りの成り行きとなった。■致、致仕は職を辞すこと。朱熹は還、つまり靈丘にもどるとした、還には、それに反して、かえっての義がある。
　齊人（せいひと）曰く、蚔鼃が爲にする所以は則ち善し。自ら爲にする所以は、則ち吾知らず。爲wèiは去聲。○孟子道行はれずして去ること能わざるを譏（そし）るなり。
■これを見た斉の人がこう評した。孟子が蚔鼃に為すべきことをさせ、その職を去ったことを善しとした。ならば、孟子が自分の為にしていることは、私にはわからない。朱熹は、孟子が斉王に道を説き、道が行はれないといふに辞して去らないのを譏るとした。
　公都子以て告ぐ。公都子は孟子の弟子なり。
■弟子の公都子がそういう噂がたっていると孟子に報告した。
　曰く、吾之を聞く。官守有る者は、其の職を得ざれば則ち去る。言責有る者は、其の言を得ざれば則ち去る。我官守無く、我言責無し。則ち吾が進退、豈に綽綽（しゃくしゃく）然として餘裕有らざらんや。官守は、官を以て守とする者。言責は、言を以て責とする者。綽綽は寬なる貌。裕は寬なる意。孟子賓師の位に居り、未だ嘗て祿を受けず。故に其の進退の際、寬裕此の如し。尹氏が曰く、進退の久速、理に當たるのみ。
■守は長官、官職のこと。官守は役人の長官。■責はつとめ、義務のこと、言責は、ここでは諫言する役目のこと。■官守も言責もない、つまり臣下ではない、朱熹は、孟子は賓師であり、禄も受けておらず、だから、進退に関しては、寛裕であったとした。次章では孟子は斉の卿とある。これは卿となる前のこと、禄も受けておらず責任はないで通用するものか？また、孟子の集団は五百人、馬車数十台で移動するといわれ、孟子の進退は、孟子一人のことではすまない。これを養ふ資金は相当を要する。その資金はどうしたのか？君臣関係を結んだものではない、対価であるといふことか。そういう士の集団が戦国時代に現れた。それを孟子が言い放ったごとく思はれる。もはや、蚔鼃ごとき大夫の時代ではない。

。孟子齊に卿爲（た）り、出でて滕に弔す。王蓋（かふ）の大夫の王驩（おうかん）をして輔行爲らしむ。王驩朝暮に見ゆ。齊滕の路を反りて、未だ嘗て之と行事を言はず。蓋gěは古gǔ盍héの反(声が合はわない）。見xiànは音現。○蓋は齊の下邑なり。王驩は王の嬖臣(へいしん：お気に入りの家臣)なり。輔行は副使なり。反は往きて還るなり。行事は使事なり。
■卿　孟子は客卿とされた。卿―大夫―士の最上。王驩は嬖臣とあり、下に齊卿とは王驩と注されており、副使といふが、実質は王驩が行っていたようである。王驩は孟子と弔問の行事については何も話し合わなかった。
　公孫丑曰く、齊卿の位、小きなりとせず。齊滕の路、近しとせず。之を反りて未だ嘗て與に行事を言はざるは何ぞ。曰く、夫れ旣に之を治めんこと或り、予何をか言はん。夫は音扶。治は字の如し。○王驩蓋し卿を攝して以て行く。故に齊の卿と曰ふ。夫れ旣に之を治むこと或るは、言ふは、有司已に之を治む。孟子の小人を待すこと、惡まずして嚴かなること此の如し。
■齊の卿としてその任務は軽いものではない、相談する時間も十分あった。帰ってきてもまだ話すこともないとはどういうことかと公孫紐は問うた。王驩がすべて取り仕切ってうまくやっており、言う事は何も無い。君子は実務を有能な者に任すのみ。
■卿となり、使として齊を代表して滕を弔問している以上、もはや先にごとき官守も言責もないと口にすれば失脚する。孟子は、孔子が果しえなかった地位に就くことには成功した。

　孟子齊より魯に葬る。齊に反りて、嬴（えい）に止まる。充虞（じゅうぐ）請うて曰く、前日虞が不肖を知らずして、虞をして匠事を敦（をさ）めしむ。嚴（いそが）しくして虞敢えて請わず。今願はくは竊かに請ふこと有らん。木以（はなは）だ美なるが若く然り。孟子齊に仕へ、母を喪（うしな）ひて、魯に歸し葬る。嬴は齊の南邑。充虞は孟子の弟子。嘗て棺を作る事を董治する者なり。嚴は急なり。木は棺木なり。以は已に通ず。以美は大美なり。
■孟子は母の葬儀で魯に帰り、斉への帰途で斉の南の嬴邑に泊まった。弟子の充虞はもともと匠事、棺を造る匠であり、孟子の母の棺を造ることを任された。その時は忙しく、口をはさむことが出来なかったが、気になることがあった。棺の用材があまりに立派なものであった。
　曰く、古は棺槨度無し。中古には棺七寸、槨之に稱（かな）へり。天子より庶人に達す。直（ただ）觀ること美をなすに非ず。然して後に人の心を盡す。稱chènは去聲。○度は、厚薄の尺寸なり。中古は、周公禮を制するの時なり。槨之に稱ふは、棺と相稱ふなり。其の堅厚久遠を欲す。特（ただ）人の觀視の美なすのみに非ず。
■稱chènは適合する、chēng は称する、言う、chèngははかり。■棺槨　棺に遺体を納め、その棺を槨に納める。古には棺槨の木の厚みの寸法に決まりはなかった。中古に棺の厚みを七寸、槨はそれに釣り合うものと天子が定めると、それが庶人に広まった、と孟子はする。寸は、元来親指の幅、周では2.25cmとみられ戦国時代も踏襲しており、7寸は15cm強であり、この厚みの棺とそれにあう槨は天子の規格としては可能であるが、庶人には無理がある。天子の冕は幅7寸、長さ1尺2寸という。見た目に立派ということのみならず、遺体をよい状態に保つための心づかいとする。
　得ざれば、以て悦ぶを爲す可からず、財無ければ、以て悦ぶことを爲す可からず。之を得て財有ることをす、古の人皆之を用ゆ。吾何爲（なんす）れぞ獨り然らん。得ざるは、法制の當（まさ）に得るべからざる所を謂ふ。之を得て財有りとするは、言ふは、之を得て而して又財有りとする。或ひと曰く、爲は當に而（なんじ）に作（す）るべし。
■不得　朱熹は法制により不得とされることとする。法制で禁じられれば、また、財がなければ、死者が悦ぶような埋葬はできない。■得之為有財、得之は法制の制約が無いこと。古では、法制の制約がないので、財があれば、立派な棺も槨も用いた。私ならそうする。朱熹は、或る人があなたの当然すべきことと言ったとした。
　且つ化者の比（ため）に、土をして膚に親（ちか）づかしむること無し。人心に於て獨り恔（こころよ）きこと無けんや。比は必bì二ér？níの反?。恔xiàoは音效。○比は猶爲のごとし。化者は死者なり。恔は快なり。言ふは、死者の爲に土をして其の肌膚に親近かせしめざるは、人子の心に於て、豈に快然として恨む所無からざらんか。
■朱熹は化者を死者とし、比を猶為、なおかつ死者のために、土から肌膚を遠ざけることは、子としても気分がよく、そうしたことを恨めしくおもうことなんぞはないとした。
、。吾之を聞く。君子は天下を以て其の親に儉せず。終を送るの禮、當になすを得べき所にして自ら盡くさざるは、是れ天下の爲に此の物を愛惜して、吾が親に薄きなり。
■朱熹は、親をあの世に送る礼において、出来るだけの事をして尽くさないというのは、天下の為に物惜しみするのはいいが、親に対して薄情であるとした。孟子は、君子たるもの、その親の葬儀でけちるとは、天下に示しがつかない、我は君子であり、君子の礼を行ったまでのこととしたのであろう。
■孟子が諸侯の宰相を目指した時には、孔門の人々は祖の孔子が果しえなかったことを為そうとした孟子を無謀な者とみたことであろう。その孟子が大国齊の卿となり、母の葬儀で魯に帰国し、盛大な葬儀を行った。得意満面の笑みがあっておかしくない。孟子は親孝行の見本として行ったばかりではあるまい。「君子は禍にあっても畏れず、福を得ても喜ばず」と述べていた孔子が、魯で大司寇に就任したとき、司馬遷は孔子世家において、「年五十六、大司寇に由りて相の事を行攝（宰相代行）し、喜色有り。」弟子がびっくりするほど喜んだとあった。
読書会：[2012年1月28日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai8.html#2012年1月28日)

。沈同其の私を以て問ふて曰く、燕をば伐つ可しや。孟子曰く、可なり。子噲（しかい）人に燕を與ふること得ず、子之（しし）燕を子噲に受くることを得ず。此に仕ふる有りて、子之を悦び、王に告（もう）さずして、私（ひそか）に之に吾子（ごし）が祿爵を與へし。夫の士も、亦王命無くして私に之を子に受けば、則ち可なるべしか。何を以てか是に異ならん。伐與yúの與は平聲。下の伐與･殺與も同じ。夫は音扶。○沈同は齊の臣。私を以て問うは、王命に非ざる。子噲･子之が事は前篇に見ゆ。諸侯の土地人民は、之を天子に受け、之を先君より傳ふ。私を以て人に與ふれば、則ち與ふる者受くる者皆罪有り。仕に官と爲る。士は卽ち仕に從ふ人なり。
■沈同は齊の臣、齊王は燕を伐つべきか否か、孟子の意向を沈同を通じて問ふたが、孟子はあくまで、沈同が個人的に問ふたものと記した。孟子は「可」と返答した。
■前篇とは梁恵王章句下。齊人伐燕勝之の注。子噲は燕王、子之は宰相。韓非子、二柄篇に、「燕の子噲賢を好む、故に子之明(あらは)に国を受けず。故に君悪(お)見(しめ)せば、則ち群臣端(たん)を慝(かく)し、君好(こう)を見(しめ)せば、則ち群臣能(のう)を誣(し)ふ。人主の欲見(あら)はるれば、則ち群臣の状態その資(し)を得るなり。故に子之は賢に託して、以てその君より奪える者なり。豎刁(じゅちょう)・易牙(えきが)は、君の欲に因て、以てその君を侵せる者なり。その卒(おはり)は、子噲は乱を以て死し、桓公は虫流れて戸より出でて葬られず。」とある。堯が賢人の許由に位を譲ろうとしたが許由は辞退した。これに因んで、子噲が子之に位を譲ると、子之は結果的に辞退せず、国が乱れ、二人とも殺された。
■子噲が子之に禅譲したのも、子之がそれを受けたのも、してはならないことだと孟子は云ふ。
■吾子は古時対人の尊称、貴方。沈同に仕える者があり、その者が優秀であり、王の許可を得ずして、貴方のをその者に譲り、その者がそれを受けたとすれば、それはすべきことか？それと何の違いがあろうか。
　齊人（せいひと）燕を伐つ。或ひと問ふて曰く、齊を勸めて燕を伐つと、有りや。曰く、未（な）かれ。沈同問ふ、燕、伐つ可しやと。吾之に應へて曰く、可と。彼れ然して之を伐つ。彼れ如（も）し孰か以て之を伐つ可しと曰はば、則ち將（はた）之に應へて曰はん、天吏爲（た）りば則ち以て之を伐つ可しと。今人を殺す者有らん。或ひと之に問ふて曰く、人殺す可しやと。則ち將之に應へて曰はん、可と。彼如し孰か以て之を殺す可しと曰はば、則ち將之に應えて曰はん、士師爲りば則ち以て之を殺す可しと。今燕を以て燕を伐つ。何爲（す）れぞ之を勸めんや。天吏は、解は上篇に見ゆ。言ふは、齊は無道にして、燕と異なること無し。燕を以て燕を伐つが如きなり。史記に亦孟子謂く、齊に勸めて燕を伐つ。蓋し此の說を傳へ聞くところの誤りなり。○楊氏が曰く、燕固（もと）より伐つ可し。故に孟子可と曰はん。齊王をして能く其の君を誅し、其の民を弔せしめば、何の不可之れ有らん。乃ち其の父兄を殺し、其の子弟を虜（とら）ふ、而して後に燕人之に畔く。乃ち是を以て咎を孟子の言に歸すは、則ち誤れり。
■齊が燕（yān、yànはつばめ）を伐った。或る人が孟子に問ふた、（孟子が）齊に進言して燕を伐ったという噂があるが本当ですか。孟子は、未勧也、勧めたことはないと述べた。沈同に聞かれたときには伐つべしと答へた。それで燕を伐ったとするが、もし、誰なら伐つことができるのか、と問ふたなら、天吏ならばよろしいと答へただろう。公孫丑章句上に、「無敵於天下者、天吏也」とあった。天の遣はした王、天下無敵の王のこと。
　燕人畔く。王の曰はく、吾甚だ孟子に慙ず。齊燕を破りて後二年、燕人共に太子平を立てて王とす。
■梁惠王章句下、第十、十一参照。
　陳賈曰く、王患ふること無かれ。王自ら以爲へらく、周公と孰れか仁にして且智ある。王の曰はく、惡（ああ）、是れ何と言ふことぞ。曰く、周公管叔をして殷を監せしむ。管叔殷を以て畔く。知りて之をせしめば、是れ不仁なり。知らずして之をせしめば、是れ不智なり。仁智は、周公、未だ之を盡くさず。而るを況や王に於てをや。賈請ふ、見て之を解かん。惡wū･監jiānは皆平聲。○陳賈は齊の大夫なり。管叔、名は鮮、武王の弟、周公の兄なり。武王商に勝ちて紂を殺し、紂が子武庚を立つ。而して管叔をして弟蔡叔･霍叔と其の國を監せしむ。武王崩ず。成王幼し。周公攝政す。管叔武庚と畔く。周公討ちて之を誅す。
■陳賈は、王に慙ずることはないとする。周公を引き合いに出した。これには王も唖然として、何と言ふことかと声を発した。周公ですら仁智は尽くせない。孟子がこれをどう解くか聞いてみましょうと言ふ。
　孟子を見て問ひて曰く、周公は何人ぞ。曰く、古の聖人なり。曰く、管叔をして殷を監せしむ。管叔殷を以て畔くと、有りや。曰く、然り。曰く、周公其の將に畔かんとするを知りて之をせむか。曰く、知らず。然らば則ち聖人且つ過有るか。曰く、周公は、弟なり、管叔は、兄なり。周公の過、亦宜（む）べならずや。與yúは平聲。○言ふは、周公は乃ち管叔の弟、管叔は乃ち周公の兄。然るに則ち周公、管叔の將に畔かんと知らずして之をせしむは、其の過免れざる所有り。或ひと曰く、周公の管叔を處すること、舜の象を處するが如くせざるは何ぞ。游氏曰く、象の惡已に著れ、而して其の志は富貴に過ぎざるのみ。故に舜是を以てして之を全くするを得。管叔の惡の若きは則ち未だ著れず。而して其の志と其の才は、皆象の比に非ず。周公詎ぞ其の兄の惡を逆へ探りて之を棄つるに忍びんや。周公の兄を愛する、宜しく盡くさざる者無かるべし。管叔の事は、聖人の不幸なり。舜誠に信にして象を喜ぶ、周公誠に信にして管叔に任す。此れ天理人倫の至り、其の心を用ふること一なり。
■孟子は陳賈の検証に答へる。周公を問はれ古の聖人、菅叔に殷を監督させたが、菅叔が背いたんですねと問はれ、その通り、周公は菅叔が背くことを知っていたのかと問はれ、知らず、では聖人も過ちを犯すのかと問はれ、それを過とするのはもっともなこと、と答へた。陳賈は我が意を得たと思った。聖人ですら過ある、まして、王においておや、と。■朱熹の頃には、周公と舜を比較して論じたようである。自分を殺して財を奪おうとした継母の弟（象）を更生させた舜、兄に殷を任せて背かれこれを討伐した周公の違いを論じたのであろう。
　且つ古の君子は、過てば則ち之を改む。今の君子は、過てば則ち之に順ふ。古の君子は、其の過、日月の食の如し。民皆之を見る。其の更（あらた）むるに及んで、民皆之を仰ぐ。今の君子は、豈徒（ただ）之を順ふのみならんや。又從うて之の辭を爲（つく）る。更gēngは平聲。○順は猶遂のごとし。更は改なり。辭は辯なり。之を更むれば則ち明を損ふ無し。故に民之を仰ぐ。順ひて之が辭を爲すは、則ち其の過愈々深し。賈其の君を勉むるに善に遷り過を改むることを以てすること能はずして、之に敎ふるに非を遂げ過を文（かざ）るを以てするを責む。○林氏が曰く、齊王孟子に慙ず、蓋し羞惡の心、自ら已むこと能はざる者有り。其の臣をして能く是の心に因りて、而して將に之に順ふこと有らしむ。則ち義勝（あ）げて用ゆ可からず。而るを陳賈は鄙夫、方（まさ）に且つ之を爲（なす）に曲げて辯說す。而して其の善に遷り過を改む心を沮（さまたげ）て、其れ非を飾り諫を拒む惡を長ず。故に孟子深く之を責む。然れども此の書、事を記すこと、散出して先後の次無し。故に其の說、必ず參（まじ）へ考へて而して後に通ず。若し第二篇十章･十一章を以て、前章の後、此の章の前に置かば、則ち孟子の意、論說を待たずして自明なり。
■古の君子は過てば改めるが今の君子は過てば順（そのまま通そうと）す。古の君子の過は日食や月食のようなもので、その欠けた部分（過）は誰にでも見えるままにする。更gèngさらには、gēngで改める。それを更めれば、日食、月食が元に戻るように、回復したことを仰ぎ見て、安心する。今の君子は、それをそのままにして、それを通すための辞をなす（弁：とりつくろう）。陳賈は君の過を改めるどころか、過を文す、といふが朱熹の注。■不可勝用、ことごとく用ふことなし。■林氏はこれを梁惠王章句下第十の後、十一の前に置いて読めば、孟子の意が自ずと分かるとした。これは逆の意味で実情を表している。その時は、そこに置けない事情が有った。そこで、ここに置いて言い訳をした。陳賈を批判しておきながら、自らの行動を文した。以下にあるごとく、齊を去る理由にした。孔子が魯を去ったのを魯に政が行われていないとしたことと同じ。孔子は魯に居られなかったと同じく、このことで、齊に居られなくなったのが歴史的経緯であろう。
読書会：[2012年2月25日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai8.html#2012年2月25日)
　孟子臣爲ることを致（かえ）して歸る。孟子齊に久しふして、道行はれず。故に去る。
■致仕、致政のは致は返還すること、官職を辞すること。
　王、就（ゆ）きて孟子を見て曰はく、前日見んことを願（のぞ）んで得可からず。侍することを得て同朝甚だ喜ぶ。今又寡人を棄てて歸る。識らず、以て此れに繼いで見ることを得可き。對へて曰く、敢へて請はざるのみ。固より願ふ所なり。朝cháoは音潮。
■就見、赴きて会ふ。■得侍同朝、少（わか）い齊王が目上の孟子に侍（さぶら）ひ、朝廷を同じくできた。■不識可以繼此而得見、これを引き継いで、会うことができるかわからない。孟子は、当方から願ふことはないが、もともとは願ふところ。孟子は去りたくなかったが、去らねばならなかったのだろう。王の意向と臣下の意向は違ったと思はれ、以下のやりとりは、当時は表に出すことが出来なく、晩年になっての言い訳であろう。
　他日、王、時子に謂りて曰はく、我中國にして孟子に室を授け、弟子を養ふに萬鍾を以てし、諸大夫、國人（くにたみ）をして皆矜式（きょうしょく）する所有らしめむと欲す。子盍ぞ我が爲に之を言はざる。爲wèiは去聲。○時子は齊の臣なり。中國は、國の中に當たるなり。萬鍾は、穀祿の數なり。鍾は量の名、六斛四斗を受く。矜は敬なり。式は法なり。盍は何不なり。
■他日とあり、孟子はまだ去らずに、齊に滞在していた。そこで、王は孟子の滞在の意図を探るために、時子に自分の代わりに孟子に会って、こう提案をしてくれと語った。■中国はこの場合、国の中、都に。矜式は慎んで手本とすること。都に室を設け、そこで弟子を育成し、諸大夫や民が孟子を規範とするように教育する、つまり家臣ではなく、師として活動する場と資金を出すので、齊に残留してくれまいかとなろう。
　時子、陳子に因りて以て孟子に告げしむ。陳子、時子が言を以て孟子に告ぐ。陳子は卽ち陳臻なり。
■時子は、それを孟子の弟子の陳子（陳臻、ちんしん）を通じて、王の意向を伝へた。孟子は、そのようにして事が伝へられたことに、がっかりした。王が直接出向いて自分を請ふことは、もはやあるまい。
　孟子の曰く、然り。夫（か）の時子、惡んぞ其の不可を知らん。如（も）し予をして富を欲せしむれば、十萬を辭して萬を受く。是れ富を欲すとせんや。夫fúは音扶。惡wūは平聲。○孟子旣に道の行はれざるを以て去れば、則ち其の義以て復留まる可からず。而るを時子知らざれば、則ち又顯らかに言ひ難き者有り。故に但言ふ、設（も）し我をして富を欲せしむれば、則ち我前日卿と爲りて、嘗て十萬の祿を辭し、今乃ち此の萬鍾の饋を受くは、是れ我富を欲すと雖も、亦此をせざるなり。
■然、そうだな、あの時子なら、さような提案を私が受けるはずがないとは分かるまい。よくそんな使いをしたものだ。時子には言っても分かるまいから、十万の禄を断った私がどうして一万を受けようとでも言って断っておけ。ついでに、富にまつわる挿話で格好をつけた。■朱熹の注は歯切れが悪い。道が行はれていないから、留まる義がないことを時子は分かっていない、とした。それは建前のへ理屈。時子のような臣を寄こして、ちょんがけするような真似をされたのが腹立たしいが、それが、おそらく当時の孟子が置かれていた立場であろう。
。季孫曰く、異（あや）しいかな子叔疑。己をして政を為さしめ、用ゐられずば、則ち亦已（や）まん。又其の子弟をして卿爲らしむ。人も亦孰か富貴を欲せざらん。而れども富貴の中に於て獨し、龍斷を私すること有り。龍lóngは音壟。○此れ孟子季孫の語を引く。季孫･子叔疑は、何れの時の人を知らず。龍斷は、岡壟の斷ちて高きなり。義は下文に見ゆ。蓋し子叔疑は嘗て用いられず、其の子弟をして卿爲らしむ。季孫其の旣に此に得ず、而して、又彼に得るを求めんと欲するを譏る、下文賤丈夫の龍斷に登る者のする所の如し。孟子此を引いて以て、道旣に行はれず、復其の祿を受くるは、則ち以て此に異なること無きを明らかにするなり。
■この挿話は、魯の季孫氏、叔孫氏、朱熹はいづれの人か分からないとする。清の李惇の「群經識小」によれば、季孫氏は季平子と、子叔疑は魯の宣公の母の弟、叔肸（しゅくきつ）の六世孫、子叔詣（ししゅくけい）、叔倪（しゅくげい；詣、倪、疑は通ず）とする、魯の昭公の頃となる。■龍斷とは壟、土の盛り上がった所、と斷、切り立った所、小高い切り立った丘。■季孫氏が子叔疑を批判したことがあったのだろう。政治を行おうとして、用ゐられず、子を卿にして、その任に就かせようとした。人は富貴を欲するもの、しかし、富貴を独り占めする、小高い丘を独り占めするのはいかがなものか。■朱熹は、道が行はれずして祿を受くは、龍斷を私すとおなじとした。
　古の市をするは、其の有る所を以て其の無き所に易ふるは、有司の者、之を治むるのみ。賤丈夫有り、必ず龍斷を求めて之に登り、以て左右に望みて市の利を罔（あみ）す。人皆以爲へらく、賤し。故に從ひて之を征す。商を征すること、此の賤丈夫より始まれり。孟子龍斷を釋するの說此の如し。之を治むは、其の爭訟を治むを謂ふ。左右に望むは、此を得て又彼を取らんと欲す。罔は、罔羅して之を取るを謂ふ。從ひて之を征すは、人其の利を專らにするを惡みて、故に就（ゆ）きて其の稅を征すを謂ふ。後世此に緣りて遂に商人を征すなり。○程子の曰く、齊王の孟子を處する所以は、未だ不可と爲さず。孟子も亦國人の矜式と爲るを肯ぜざる者に非ず。但齊王實は孟子を尊しと欲するに非ず。乃ち利を以て之を誘はんと欲す。故に孟子拒みて受けず。
■古い市とは物物交換の場で、役人はその場での訴訟を治めていたのみ。■賤丈夫、賤しき丈夫は男のこと。小高い丘を独り占めし、左右に望みて市の利を罔すは、左の（安き）を得て右に（高く）売り、利益を独り占めする。それで人皆、この男を賤しいと思った。■征商を朱熹は、この男が利益を独占するのをにくみ、税を征し、後世の商人への税を征すことになったとする。征は彳（行き）て正す、後、税を管理する義となる。■龍斷を私すことを征す、それが商人への課税の始まりといふ挿話が何故必要なのか。程子は、孟子は齊に留まりたかったが、齊王が利益を以て、孟子を引き止めようとしたことを拒否したとみた。
読書会：[2012年3月17日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai9.html#2012年3月17日)
　孟子齊を去りて、晝（ちう）に宿す。晝は字の如し。或ひと曰く、當に畫huàに作るべし。音は獲huò。下も同じ。○晝は齊の西南の近邑なり。
　王の爲に行くを留めんと欲する者有り、坐（ざ）して言ふ。應へず、几に隱（よ）りて臥せり。爲wèiは去聲。下も同じ。隱yìnは於yú靳jìnの反。○隱は憑（よる）なり。客坐して言ふ、孟子應へずして臥す。
■王の為に行ふ立場であれば、名前が分かっていようが伏せたのだろう。坐して言へば、坐して応接するものと思ったが、孟子は何も返答せず、几に身体を預け、そこに顔を臥せてしまった。
　客悦びずして曰く、弟子齊宿して而して後に敢へて言ふ。夫子臥して聽かず。請う、復敢へて見ること勿けん。曰く、坐せよ。我明らかに子に語（つ）げん。昔者魯の繆公（ぼくこう）子思の側に人無んば、則ち子思に安んずること能はず。泄柳（せつりゅう）･申詳（しんしょう）、繆公の側に人無けれは、則ち其の身を安んずること能はず。齊zhāiは側zhāi皆jiēの反(?)。復fùは扶fú又yòuの反（?）。語yùは去聲。○齊宿は、齊戒宿を越るなり。繆公禮して子思を尊び、常に人をして候伺せしめ、誠意を其の側に道達して、乃ち能く安んじて之に留む。泄柳は魯人。申詳は子張の子なり。繆公之を尊ぶこと子思に如かず。然れども二子の意、苟も容れず。賢者其の君の左右に在りて、之を維持調護すること有るに非ずんば、則ち亦其の身を安んずること能はず。
■弟子は年少者、齊宿は物忌みして一夜を過ごすこと、齊宿而後敢言は、この人物が畏れ多くもつつしんで申し上げること。夫子（孟子は）依然として顔を臥せて知らぬ顔をしている。もう、二度とお会いしたくもない、と孟子に言ふと、孟子は、まあ、坐れと呼びかけた。■魯の繆公（穆公の在位は前410～前377）。子思（前483？‐前402？）とされ、若い宣王と晩年の孟子の関係と類似している。繆公は子思を引き留めるために、子思の側に人を配した。子思が大事にした泄柳･申詳という賢人の意を穆公は入れなかった。二人は君主の左右で輔佐していないと、不安になった。
　子長者の爲に慮りて、子思に及ばず。子長者を絶つか。長者子を絶つか。長zhǎngは上聲。○長者は孟子自ら稱す。言ふは、齊王、子をして來らしめず、而るを子自ら王の爲に我を留んと欲（す）。是れ我が爲に謀る所以は、繆公の子思を留むるの事に及ばず。而して先ず我を絶つ。我の臥して應へざること、豈に先ず子を絶つを爲さん。
■長chángはzhǎngで年上の人、長者はここでは孟子。■朱熹は、繆公が子思を慮った故事と比すれば、宣王が派遣した人物でもないものから絶縁される前に、孟子の方から絶縁する、むしろ、のっけから無視をするのが筋といふ。■文調は、あなたは長者(孟子)の為に慮ったというが、この長者（私）が子思に及ばぬとするのか。あなたは怒って私を切り捨てた。私はすでにあなたを切り捨てていたのが分からぬか。
　孟子齊を去る。尹士人に語げて曰く、王の以て湯武爲る可からざることを識らざるは、則ち是れ不明なり。其の不可を識りて、然して且つ至るは、則ち是れ澤を干（もと）むるなり。千里にして王に見る、遇せられざるが故に去る。三宿して而して後に晝を出づ。是れ何ぞ濡滯（じゅたい）なる。士は則ち茲に悦びず。語yùは去聲。○尹士は齊人（ひと）なり。干は求むなり。澤は恩澤なり。濡滯（とどこおりとどまる）は遲留なり。
■尹士は齊の知識人の見解を代弁していよう。宣王を湯王や武王とするなど出来ぬことと分からぬは孟子の不明、もしそれを不可と分かってやって来たのなら恩沢（俸禄）目当て。千里をいとわず来たりて、遇せられず去る。それも晝に未練がましくも三日も遅滞する。士（尹士；私）は、そこがおもしろくない。
。高子以て告ぐ。高子も亦齊人。孟子の弟子なり。
　曰く、夫（か）の尹士惡んぞ予を知らんや。千里にして王を見るは、是れ予が欲する所なり。遇せられざるが故に去る。豈に予が欲する所ならんや。予れ已むことを得ざる。夫fúは音扶。下も同じ。惡wūは平聲。○王を見るは、以て道を行はんと欲す。今道行はれず。故に已むを得ずして去る。本より此の如きを欲するに非ず。
■夫尹士としており、孟子はよく知っていたのであろう。あの男に私のことが分かるはずがない。已むを得ず去るが、それは私が決めたことである。朱熹は、孟子は道を行はんとして来たのであり、道が行はれないから去る、孔子が魯を去ったと同じことであるとした。
。予三宿して晝を出づ。予が心に於て猶以て速やかなりとす。王庶幾（こひねが）はくは之を改めんことを。王如し諸を改めば、則ち必ず予を反さん。改むる所は、必ずや一事を指して言ふ。然れども今考ふ可からず。
■孔子の去り方と孟子の去り方は違った。孟子は、晝に三泊し、これでもまだ速やかとした。王がこのようなやり方を改める（自ら孟子に残ることを求める）ならば、私を戻すことになるとした。
　夫れ晝を出でて王予（われ）を追はず。予（われ）然して後に浩然として歸る志有り。予然りと雖も、豈に王を舍てんや。王、由（なを）用（も）て善をすること足れり。王、如し予を用ゐせば、則ち豈に徒（ただ）齊の民安からんや。天下の民舉（みな）安からん。王庶幾はくは之を改めんことを。予日々に之を望む。浩然は、水の流れて止む可からざるが如し。楊氏が曰く、齊王天資朴實、勇を好み、貨を好み、色を好み、世俗の樂を好むが如き。皆以て直に告げて孟子に隱さず。故に以て善をするに足れり。若し乃ち其の心然らずして、謬りて大言を爲して以て人を欺くは、是の人終に與に堯舜の道に入る可からざる。何の善か之れ能くせん。
■舍shěで捨てる、宿舎の舎はshè。■晝を出た孟子を王は追はなかった。それで、すっきりと魯に帰る気になった。しかし、それでも、王を捨てたわけではなかった。王は善を為す資質があり、王が私を用ゐるなら、齊の民のみならず天下の民挙げて安んじよう。王が改め孟子を用ゐることを望んだとする。■楊氏は、王は天性が素朴で隠しごとのない性格で充分善を為すに足るが、大言を為して人を詐いだ、これでは駄目とした。何を大言して何を詐いだかが分からない。
　予豈に是の小丈夫の若く然らんや。其の君を諫めて受けざれば、則ち怒り悻悻（こうこう）然として、其の面に見（あら）はれ、去れば則ち日の力を竆（つくし）て、而して後に宿せんや。悻xìngは形xíng頂dǐngの反（声が合はない）。見xiànは音現。○悻悻は怒る意なり。竆は盡くすなり。
■是小丈夫とは誰のことか分からない。是小丈夫は、君を諌めて受け入れられないと、怒りがその顔に現れ、去るとなれば、一日で離れることが出来る限りはなれ宿泊する。そういう行為はとらないのが孟子という。
　尹士之を聞きて曰く、士は誠に小人なり。此の章、聖賢の道を行ひ、時を濟ひて、汲汲の本心、君を愛し民を澤す、惓惓の餘意を見る。李氏が曰く、此に於て君子憂へれば則ち之を違（さ）るの情、而して蕢を荷ふ者、果と爲る所以を見る。
■尹士はこれを聞いて、士（自分）はまことに小人であったと言った。■濟時は世の困難をすくふ。澤民は民をうるおす、恩沢を及ぼすこと。惓惓は慎み、ていねいなこと。
読書会：[2012年3月24日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai9.html#2012年3月24日)
　孟子齊を去る。充虞路にして問ふて曰く、夫子不豫の色有るが若く然り。前日虞諸を夫子に聞けり。曰く、君子は天を怨みず、人を尤めず。路にして問ふは、路中に於て問ふなり。豫は悦ぶなり。尤は過なり。此の二句、實は孔子の言。蓋し孟子嘗て之を稱して以て人に敎ふるのみ。
■不豫の色、顔色が不悦なこと。弟子の充虞は、天を怨まず、人を尤めずと言っていた孟子が、不機嫌な顔をしているのをみて、言行が一致しないと質問した。■論語、憲問篇、「子の曰はく、我を知る莫きなりか。子貢が曰く、何為れぞ其れ子を知る莫きなり。子の曰はく、天を怨みず人を尤めず。下學して上達す。我を知るは其れ天か」とある。この句は孔子が、自分を知る人が無いことを憂えている。天のみが私を知ってくれる、の義であり、充虞はこの句の意味を充分には理解していない。
　曰く、彼も一時、此れも一時なり。彼は前日。此は今日。
■朱熹は前日も一時、今日も一時とする。斉王も家臣も我を知る無し、我を知るは天のみか、が前日。不機嫌な顔をしているのが今日。両方とも、一時のこと、時に（常に）思ふ事は以下のとおり。
　五百年にして必ず王者興ること有り。其の閒必ず世に名ある者有り。堯舜より湯に至り、湯より文武に至りて、皆五百餘年にして聖人出づ。名世は、其の人の德業聞望、一世に名づくる可き者、之の輔佐と爲るを謂ふ。皐陶･稷･契･伊尹･萊朱･太公望･散宜生の屬の若し。
■皐陶（堯帝、舜帝の法官）･稷（舜帝の農官、周の始祖）･契（禹の司徒、殷の始祖）･伊尹（湯の宰相）･萊朱（湯の賢臣）･太公望（武王の軍師）･散宜生（文王の四友の一人）、王者が興るときにはこれを輔佐する者がある。
。周より來（このかた）、七百有餘歳。其の數を以てすれば則ち過ぎたり。其の時を以て之を考へれば則ち可なり。周は、文武の閒を謂ふ。數は、五百年の期を謂ふ。時は、亂極まりて治を思い、以てすること有る可きの日を謂ふ。是に於て一つもする所有ることを得ず。此れ孟子の不豫無きこと能はざる所以なり。
■文王、武王興りて700余年、500年期を随分過ぎており、そういう王が現れてくる可能性はある。そうであるのに、すべきことがないというので、孟子の顔色がよくないと朱熹はする。
。夫れ天、未だ天下を平治せんと欲せず。如し天下を平治せんとせば、今の世に當りて、我を舍いて其れ誰ぞ。吾何爲れぞ不豫せんや。夫fúは音扶。舍shěは上聲。○言ふは、此の時に當りて、我を齊に遇はざらしむるは、是れ天未だ天下を平治せんとせざればなり。然れども天意未だ知る可からざる。而して、其の具は又我に在り。我何爲れぞ不豫せんや。然れば則ち孟子不豫有ること然りとする者の若しと雖も、而して實は未だ嘗て不豫ならざるなり。蓋し聖賢の世を憂ふるの志、天を樂しむの誠、並び行はれて悖（もと）らざる者有ること、此に於て見ゆ。
■孔子の言、「文王、既に沒し、文茲（ここ）に在（あ）らずや。天の將に斯の文を喪（うしな）ふや、後死の者、斯の文に與（あづか）るを得ざるなり。天の未だ斯の文喪はざるに、匡人、其は予を何如せむ（子罕篇）」を彷彿させる。孔子は、文王の文が自分に在るとした。孟子は天が天下を平治せんとするなら、自分以外に誰が居ようとした。天の時が至っておらぬことが如何ともしがたいとする。別に不機嫌といふものではない。
　孟子齊を去りて休に居る。公孫丑問ひて曰く、仕へて祿を受けざるは、古の道か。休は地の名。
。曰く、非なり。崇に於て吾王を見ることを得たり。退きて去る志有り。變ずることを欲せず。故に受けざるなり。崇も亦地名。孟子始めて齊王を見て、必ず合はざる所有り。故に去る志有り。變は、其の去る志を變ずるを謂ふ。
■仕へて祿を受けざるは、古の道ではない。孟子と宣王が最初に会ったのは崇の地。すぐに去るつもりであった。その思ひを変へるつもりはなかったので、禄を受けなかった、と孟子はする。当初から、宣王は天下の王たるに足らずとみていたことになる。
　繼いで師命有り、以て請ふ可からず。齊に久しきは、我が志に非ず。師命は師旅の命なり。國旣に兵を被り、去るを請ひ難し。○孔氏が曰く、仕へて祿を受くるは、禮なり。齊の祿を受けざるは、義なり。義の在る所、禮時有りて變ず。公孫丑一端を以て之を裁せんとするは、亦誤りならずや。
■連続して軍令が下され、去ることを願い出ることが出来ず、齊に長くいたが、本意ではなかった。師命にゴーサインを出したのは孟子ではなかったか。

「天の時は地の利に如かず、地の利は人の和に如かず」で始めた孟子は、天が平治を欲しておれば、孟子が宣王を補佐して天下の王としえたはずであるが、天の時も地の利も人の和もなかったとおさめてしまった。しかし、最後の二句を付け足したことで、頭隠して尻隠さず、①　宣王を乗せたが限度があった、②　宣王をして燕を討たしめたこと、その戦争に対する見通しが甘かった。この二点をくっきりと浮かび上がらせることになった。

読書会:[2012年4月28日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai9.html#2012年4月28日)